

## 中学校運動部活動の効果的指導の取り組みに関する研究 ：教員と外部顧問へのインタビュー調査をもとに（Ⅱ）

田井優子, 柳瀬慶子, 木宮敬信, 黒岩 一雄,  
百瀬容美子, 河合美保\*, 川里 卓\*\*, 神力亮太, 大矢隆二

A Research Regarding the Efforts of Effective Instruction  
in Junior High School's Club Activities : Based on Interviews  
with Faculty and External Advisers (II)

Yuko TAI, Keiko YANASE, Takanobu KIMIYA,  
Kazuo KUROIWA, Yumiko MOMOSE, Miho KAWAI,  
Suguru KAWASATO, Ryota SHINRIKI, Ryuji OYA

2019 年 11 月 8 日受理

### 抄 録

本研究は、「静岡市立中学校部活動ガイドライン」の実施に関わって生じるマイナス面を検討し、中学校運動部活動における効果的指導の手掛かりを得ると共に、外部顧問との連携・協働を進める際の観点を明らかにし、学校と地域が共に青少年の育成を目指す方法について考察することを目的とした。研究方法は、教員および外部顧問に半構造化インタビューを行い M-GTA を用いて分析した。

その結果、効果的指導を考える手掛かりとして、練習内容や指導法の工夫は必須で、子どもの体力向上を目指し、苦手意識のある生徒の技術力を伸ばす練習内容や指導法の考案・実践が必要であることが示唆された。また、多くの生徒が参加でき体力等を育む部活動の特性をより活かすためには、教員と外部顧問との連携・協働は必須で、互いに部活動の目的や育てたい子どもの姿を共有し、各々が果たすべき役割を明確にして役割を遂行することが必要であることが示唆された。

キーワード：中学校、運動部活動、外部顧問、M-GTA、課題

---

\* 静岡大学教育学研究科教員養成・研修高度化推進センター

\*\* 名古屋大学大学院人文学研究科博士課程

## I 緒言

部活動をめぐる問題として顧問教員の多忙化や専門的指導能力の不足が指摘される中で<sup>1</sup>、部活動指導に関わる負担を軽減しながら活動の質を高める目的で、外部指導者を法令で学校職員として位置づけ、教員の代わりに部活動を指導する「部活動指導員」が2017年4月に制度化され<sup>2</sup>、全国で配置が進められている。

長時間労働の問題を含めた教員自身の働き方の是正という観点から部活動の在り方を見直す動きが見られる一方で、子どもの視点に立った望ましい部活動の在り方も模索されている。たとえば、文部科学省が2013年5月に作成した「運動部活動での指導のガイドライン」では、生徒の心身の健康管理、事故防止、体罰・ハラスメントの根絶を徹底することが指針として示されている。また、「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」(スポーツ庁, 2018)や「文化部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」(文化庁, 2018)では子どもたちの生活のバランスにも配慮し、十分な睡眠時間や勉強時間を確保するとともに、家族や友人等と過ごしたり、部活動以外の地域のさまざまな活動に参加したりできるよう、部活動の適切な活動時間や休養日等の基準が示された。

本論文の目的は、部活動指導員の導入や「ガイドライン」の実施に関わって生じると予想される諸課題のうち、マイナス面を取り出して検討を加え<sup>3</sup>、そのような課題との関わりで、これからの中学校運動部活動の効果的指導について考える手がかりを得ることである。さらに、今後、部活動指導員との連携・協働を進める際に必要となるとと思われるいくつかの観点を示し、多くの生徒が参加できるという部活動の特性を維持しつつ、学校と地域が共に青少年を育成する方法の一端についても検討を行うことにしたい。

<sup>1</sup> 文部科学省が2016～2017(平成28～29)年度の2か年で実施した調査では、中学教諭は平均で1日あたり平日41分、土日で2時間10分の部活動指導(授業に含まれないクラブ活動・部活動の指導、対外試合引率(引率の移動時間を含む)などに関わっていること、土日休日は10年前に比べて約1時間長くなっていることが明らかとなった(文部科学省初等中等教育局「教員勤務実態調査(平成28年度)の集計【確定値】」2018年9月)。

また、「学校運動部活動指導者の実態に関する調査報告書」(公益財団法人日本体育協会, 2014年)によれば、運動部活動を担当する教員の競技経験について、担当教科が保健体育ではなく、かつ、担当部活動の競技の経験がない教員の割合は、中学校で45.9%(有効回答数3,964)、高等学校で40.9%(有効回答数4,438)であった。

<sup>2</sup> 「学校教育法施行規則の一部を改正する省令」(2017年3月14日公布, 同年4月1日より施行)。本省令は中学校、高等学校等におけるスポーツ、文化、科学等に関する教育活動(学校の教育課程として行われるものを除く)に係る技術的指導に従事する「部活動指導員」の職務等について規定したものである。活動中の事故等に対する責任の所在が不明確であることなどから、外部指導者だけでは大会等に生徒を引率できないが、部活動指導員は単独で対外試合の生徒引率や部活指導ができる。なお外部指導者の活用も引き続き実施されている。

<sup>3</sup> プラスの側面については既に検討が行われている。大矢隆二・田井優子・木宮敬信・黒岩一雄・柳瀬慶子・百瀬容美子・河合美保・川里卓(2019)中学校運動部活動の効果的指導の取り組みに関する研究: 教員と外部顧問へのインタビュー調査をもとに(I). 常葉大学教育学部紀要, 39:117-126.

## II 研究方法

### 1. 調査方法

#### (1) 調査対象

静岡市の公立中学校で部活動指導に従事する教員と、教員と同等に「単独指導」や大会等の引率ができる部活動指導員（以下、外部顧問）を対象とした。

男女比、年齢、指導分野が偏らないよう静岡市教育委員会の協力を得て8名<sup>4</sup>を選出した。

#### (2) 調査方法と内容

調査方法は、インタビュー・ガイドをもとにした半構造化面接法<sup>5</sup>により、インタビュー調査が展開された。インタビュー・ガイドの作成にあたっては、静岡市内の中学校保健体育科教員（男性40代）の予備インタビューをもとに、異なる研究者間（生涯学習・社会教育学、スポーツ心理学・臨床心理士、保健体育科教育学）3名のブレインストーミングによって作成された（表1）。

#### (3) 調査時期及び面接場所

日時：2018年8月10日（金）13:00～14:30（教員）、15:30～17:00（外部顧問）

場所：教員は勤務先、外部顧問は常葉大学静岡草薙キャンパス（静岡県静岡市）

表1 インタビュー・ガイドの内容

1. 部活動の意義について
2. 練習の計画について
<ul style="list-style-type: none"> <li>活動時間について、工夫点をお聞かせください。</li> <li>教養日の設定について、工夫点をお聞かせください。</li> <li>専門領域以外の指導計画について、工夫点をお聞かせください。（校内指導者（教員）のみ）</li> </ul>
3. 役割について
<ul style="list-style-type: none"> <li>校内指導者（教員）に何を期待するのか、お聞かせください。</li> <li>外部顧問に何を期待するのか、お聞かせください。</li> <li>保護者に何を期待するのか、お聞かせください。</li> </ul>
4. 短時間練習における課題と工夫点について
<ul style="list-style-type: none"> <li>環境面について、お聞かせください。（課題と工夫）</li> <li>指導者のネットワークについて、お聞かせください。（課題と工夫）</li> <li>技術面について、お聞かせください。（課題と工夫）</li> </ul>
5. その他

<sup>4</sup> 内訳は、静岡市中学校教員（A：50代男性、B：40代男性、C：40代女性、D：30代女性）の4名と外部顧問（E：50代男性、F：60代男性、G：70代男性、H：50代男性）4名の計8名の指導者を対象とした。なお、静岡市の事例を取り上げた理由として、外部人材との連携による部活動の短時間化への対応がすでに進められており、取組にあたっての課題をいち早く把握できると考えられたからである。

<sup>5</sup> まず、インタビュー・ガイドに沿った質問を行い、その後個別のケースに応じて面接者が自由な裁量で質問を投げかけ対話を深めていく手法である。面接は60分程度実施した。なお、被調査者の了解を得てICレコーダーに記録を残した。

## 2. 分析方法

データの分析は、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Grounded Theory Approach: 以下、GTA と記す）による検討を行った<sup>6</sup>。GTA は質的データを体系的に分析するための手法のひとつであり<sup>7</sup>，帰納重視の分析による理論の生成を目的としている。理論の捉え方や分析手続きによっていくつかのヴァリエーションがあるが<sup>8</sup>，ここでは木下康仁が開発した修正版 GTA（Modified Grounded Theory Approach: 以下、M-GTA と記す）により検討を行った。

表2 分析ワークシートの例

概念名	指導方針の一致度（14 事例）
定義	外部顧問と教員の指導方針が一致していない
ヴァリエーション （具体例）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 今現在の部活動で一番難しいのは，外部指導員との兼ね合いです。外部顧問，外部指導員がその種目の専門家ではあるけれども，言うてはなんですが教育者ではないです。（B）</li> <li>・ ただすごく年上で，その指導経験も長くてこのチームのことも代々ずっと見ているということを考えると私からすると，口出しはなかなかできないですね。（D）</li> <li>・ 先生と外部指導の人たちとバチバチやっちゃう。だからけっこう，うちらもやりはじめるとこうムキになってのめりこんじゃう方だもんで，そこを冷静に。この先生だと補助にまわればいい，できない先生だったら，実質的にアシストをしてフォローは先生にしてもらおうとか。（F）</li> <li>・ 顧問につかれた先生の分からなくても協力してくれる部分があればいいなって。おれ，興味ないって方もたまにいらっしやるので。顧問になっちゃったって思ってる方とやるときは，非常にやりにくいです。そういう大変さを補うためにも私たちみたいなのはあると思うんですけど。（H）</li> </ul> <p>（10 事例省略）</p>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 外部顧問が学校や当該部活動の事情をよく理解せずに支援にはいることもあり，それはかえって顧問の手を煩わせることになるかと危惧している（B）</li> <li>・ 教員の中には，部活動顧問になることを前向きに捉えられない人もおり，非常にやりにくさを感じていることが伺える（H）（以下省略）</li> </ul>

<sup>6</sup> GTA については，木下康仁（2003）グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践―質的研究への誘い，弘文堂，pp.236-237 などを参照。

<sup>7</sup> 「グラウンデッド・セオリー」 Gary R. VandenBos（原著），繁榊算男・四本裕子（翻訳）『APA 心理学大辞典』p.218

<sup>8</sup> 能智正博「質的研究」（下山晴彦ほか編『誠信心理学辞典』新版，誠信書房，2014 年），pp.47-48

表3 生成されたカテゴリーと概念およびそれに対応する生徒の発言例

カテゴリー	サブカテゴリー	概念	定義	ヴァリエーション
A. 環境の制約	カテゴリー	施設使用の不自 由さ	他の部活や行事との体育館割 り当てによる練習場所確保の 難しさ	…土曜日の午後の部活は、2面しかない体育館で、4つの部活をどうやって回すかっていう話になります。(D)
	練習環境の 制約	限られた場所での 練習	限られた場所での練習をより効 率的に取り組む工夫	…ずっと体育館が使えるわけでもないで、外の時間はとにかく走る。中に入ったらばっとボールを使ってやるとかかっていうような感じで、うまくあんまり時間を無駄にならないようにやったりとかはしているんですけれども。(C)
		時間外活動との 関係	部活動外で練習の取り組みを 期待せざるを得ない現状	夜、体育館とか行ってたりしたので、陸上はそういうのがあるかもしれないですけど、やっぱり外に色々求めていかないとなかなか競技力っていうところだと…。(C)
		技術の低下	時間短縮における生徒の基礎 的な技術力の低下	じゃあ、その子でできるようにするにはどうしたらよいかっていうと、必要なのはやっぱり時間なんですよね。(E)
	練習時間の 制約	時間と練習内容 の調整	練習時間の制約と成果を出す ことへの葛藤	やる前は、指導者のなかで、要は学校に教えに行く時に行く言われたのは、実績を出さないとやるかやばいよって。(F)
B. 指導者間の 連携	競技固有の 制約	苦手意識のある 生徒への支援	練習時間の制約があるがゆ え、ますます実力差が広がる	これだけしかやっちゃだめっていう枠を決めるのは、論理立てが乱暴な気がしてならない。そうするとできない1周の子を捨てざるを得なくなっちゃうかな。(E)
		試合数の問題	部活動の設定日に合わせた試 合参加の難しさ	さっき言った部活動をやらせない日、学校が定める部活動をやらせない日というのがさらに増えてくるということになる、大会参加ができませんとか…。ということになると思うのですよね。(D)
	役割像の不 整合	指導方針の一致 一致していない	外部顧問と教員の指導方針が 一致していない	外部指導員として見て一番のチームを作りたんだってあって、ガンガンそこに課題を与える方ですと、もうそれは生徒もついていけない。親も反感が出る。顧問は何してると話になる。顧問の方からいうと、自分のやり方でマッチしてまっせんっていう感じでそこでまた問題が起きるっていう。(B)
		指導者への懸念	中長期に指導を実践してきた ことによる指導者間の困惑	事務的なところをしっかりとやっていただければ、変な話、技術的なものは僕らがやるので…。(E) ただ練習をやっていると、終わったら挨拶して帰りますというのはやめて下さい。(H)
	外部顧問と 学校スタッフ ム	外部顧問の役割	外部顧問としての役割の遂行	先生のできるころは先生に落としておいて先生同士で話をして、外部の部分はウチらがカバーをしてうまく回していけばいい感じでやってる状態です。(F) 自分とその生徒との間をうまく取り持っていて欲しいっていうのも変なんだけど、間のところにいるだけと。(B)
連携の困難	顧問の専門性・ 役割	顧問としての役割の遂行	あとかコーチと生徒の間に立つというか、やっぱりコーチの指導がうまく生徒に入るようにするのにごく今、それが私の仕事かなっていうか。(C)	あとコーチと生徒の間に立つというか、やっぱりコーチの指導がうまく生徒に入るようにするのにごく今、それが私の仕事かなっていうか。(C)
	生徒との信頼関係	生徒との信頼関係	生徒との信頼関係が集団維持に 影響	本当にこの部活動って信頼関係がすべてなので、一端信頼が崩れたら子どもは絶対についてこないですし、うん。成り立たないんですよ。(B)
連携の困難	意思疎通の困難	指導者間の連携が上手いか ない	ずっとやり取りがうまくいかなかった。今だにオーダーを聞いてこないから「どうなってます、申込書？」って聞いたりすると、あつたれてたって。(E)	ずっとやり取りがうまくいかなかった。今だにオーダーを聞いてこないから「どうなってます、申込書？」って聞いたりすると、あつたれてたって。(E)
	連携の困難	意思疎通の困難	指導者間の連携が上手いか ない	苦情があった時に、今年初めて顧問を持たれたる先生なのですが親からの問い合わせや苦情があったときには、返事をしないで私にくださいと言っているのですが…(H)

M-GTA の特長は、(i) 分析ワークシート (表 2) を用いて分析を行うため、分析プロセスが明示化されるところ、(ii) 分析結果を図で示し、現象の多様性と因果関係の複雑性を把握できること、などが挙げられる。

本研究の M-GTA の主な分析は、まず、録音されたインタビュー・データの逐語録から概念を生成し、次に生成した概念と概念との関係を関係図に示し、複数の概念からなるカテゴリーあるいはサブカテゴリーを生成した。そしてカテゴリー間の因果関係等を文章化 (ストーリーライン) したのちに、結果を図解化する手順 (木下, 2003, pp.236-237) に沿って実施した。

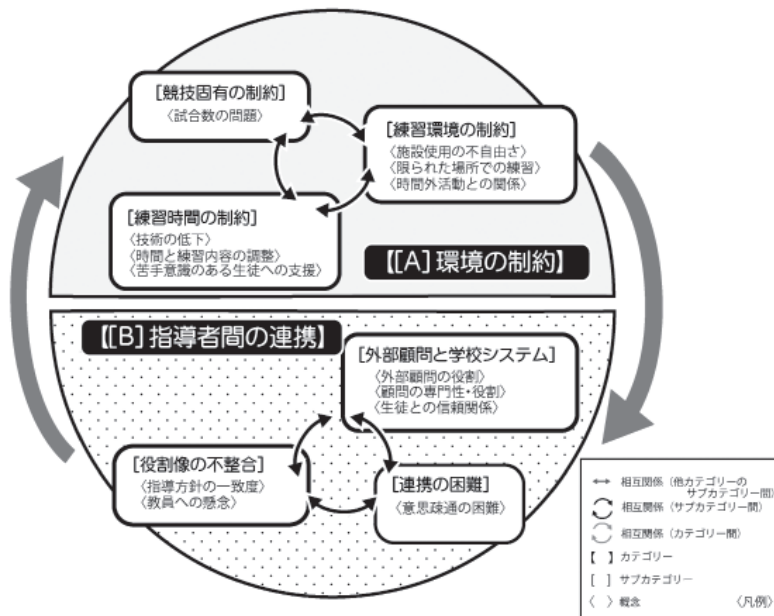


図1 生成されたカテゴリー，サブカテゴリー，概念の関係

### Ⅲ 結果と考察

分析の結果、2つのカテゴリーおよびそれに含まれる6個のサブカテゴリー、13個の概念が生成された。カテゴリー、サブカテゴリー、概念のリストおよび代表的なヴァリエーションは表3に示す通りである。

#### 1. カテゴリー，サブカテゴリー，概念の概要

各カテゴリーおよびそれに含まれるサブカテゴリーの概念の概要は、以下の通りである。文中の【 】はカテゴリーを、[ ]はサブカテゴリーを、< > は概念を示す。

#### 2. 【[A] 環境の制約】の相互関係

【[A] 環境の制約】は、[練習環境の制約][練習時間の制約][競技固有の制約]



の3つのサブカテゴリーから成り立っていた。

〔練習環境の制約〕では、次の3つの概念が挙げられた。まず、他部活や行事との兼ね合いによって割り当てられる体育館使用頻度の少なさによる〈施設使用の不自由さ〉が挙げられた。次に、割り当てられた体育館の短時間使用によって運営方法や屋外での練習内容の工夫、家での練習等指導法の模索という〈限られた場所での練習〉が挙げられた。さらに、短時間練習のために学校外に練習場を求めざるを得ないという〈時間外活動との関係〉が挙げられた。

〔練習時間の制約〕では、次の3つの概念が挙げられた。まず、練習時間減少による基礎的な技術や基盤となる生徒の体力・気力の低下に関する懸念、練習量の違いによる私学との技術差に見られる〈技術の低下〉が挙げられた。また、冬場の練習時間の短さは顕著であり、そうした限られた練習時間内で成果を出すことを求められるプレッシャーの中で、練習時間減少に伴い練習内容を工夫する必要があるという〈時間と練習内容の調整〉が挙げられた。さらに、一律短時間練習によって技術力の低い生徒への支援が困難になり、ますます技術差が広がり基礎力のばらつきが見られるという〈苦手意識のある生徒への支援〉が挙げられた。

〔競技固有の制約〕では、次の1つの概念が挙げられた。部活動の設定日に合わせて試合に参加することの困難さから試合数が減少する懸念があり、中には大会参加にポイント制が導入されている種目もあることから、〈試合数の問題〉が挙げられた。

【練習時間の制約】と【練習環境の制約】は密接に関連しており、練習時間の短さが、【練習環境の制約】で挙げた〈施設使用の不自由さ〉につながっている。まず、【練習環境の制約】で挙げた〈限られた場所での練習〉や【練習時間の制約】で挙げた〈時間と練習内容の調整〉から分かるように、限られた練習時間・施設使用頻度の中で、体育館以外でも可能な練習や短時間でも行える練習方法の考案など、練習内容・指導方法の工夫が求められている実態が浮かび上がった。次に、【練習時間の制約】で挙げた〈技術の低下〉や〈苦手意識のある生徒への支援〉からも分かるように、工夫された練習内容や指導によって、生徒の基礎的な技術や体力を向上させる必要性も浮かび上がり、特に技術面で〈苦手意識のある生徒への支援〉ににとっての工夫が必須であることが考察された。さらに、【練習環境の制約】で挙げた〈時間外活動との関係〉や【競技固有の制約】で挙げた〈試合数の問題〉から分かるように、練習時間や練習環境の制約によって、学校外の練習場における部活動実施や、試合数の減少につながる懸念もあり、ガイドラインに沿った部活動運営の難しさも見られた。

### 3. 【[B] 指導者間の連携】の相互関係

【[B] 指導者間の連携】は、〔役割像の不整合〕〔外部顧問と学校システム〕〔連携の困難〕の3つのサブカテゴリーから成り立っていた。

〔役割像の不整合〕では、次の2つの概念が挙げられた。まず、教員と外部顧問との指導観や指導方法の違いにより、教員が外部顧問と生徒との間に入って調整役を務める必要がある問題が出てきており、指導間でその違いをすり合わせる〈指導方針の

一致度〉が挙げられた。また、外部顧問が教員に求める事務的業務等の遂行力が見られないという〈指導者への懸念〉が挙げられた。

〔外部顧問と学校システム〕では、次の3つの概念が挙げられた。まず、練習試合の予定などを外部顧問同士で下相談しておいてから教員へつなぐなどの役割を果たす〈外部顧問の役割〉が挙げられた。一方、教員は、担当部活が専門種目でなく技術指導が難しい場合でも、外部顧問と生徒との間に入ってスムーズに指導が入るようにするなどの役割を果たす〈顧問の専門性・役割〉が挙げられた。さらに、教員は自身の専門種目ではない部活動を担当している戸惑いがあったり、勝利よりも仲間関係を重視する女子生徒の指導の困難さがあったりする中で、教員と生徒との信頼関係が最も大切であり生徒の意欲向上や集団づくりに関連してくるという〈生徒との信頼関係〉が挙げられた。

〔連携の困難〕では、次の1つの概念が挙げられた。教員と外部顧問との役割分担の明確化や部活動運営のための連携が難しいという〈意思疎通の困難さ〉が挙げられた。

【役割像の不整合】の〈指導方針の一致度〉から、教員と外部顧問との指導観や指導方針を明確にしておく必要性が浮かび上がった。部活動における目標や育てたい子どもの姿などを共有することによって、【外部顧問と学校システム】で挙げられているような〈外部顧問の役割〉と〈顧問の専門性・役割〉が明確に規定され、例えば外部顧問は学外との連絡役を果たしたり、教員は生徒との信頼関係を培う役割を果たしたりするなど、それぞれの役割遂行がスムーズになると考えられる。一方、指導観や指導方針のずれから、それぞれの役割が不明確になることにより、本来必要な役割を遂行することが出来ずに【役割の不整合】で挙げられている〈指導者への懸念〉として現れたり、【連携の困難】で挙げられている〈意思疎通の困難さ〉を一層感じたりすることが考えられる。

以上のことから、以下の2点が考察された。1点目は、中学校運動部活動の効果的指導を考える手掛かりとして、練習時間や練習環境に制約があるために練習内容や指導法の工夫が必須であり、その工夫の内容としては子どもの体力向上を目指すものであると同時に、部活の運動種目に対して苦手意識のある生徒の技術力を伸ばすための練習内容や指導法の考案・実践が必要であることが考察された。2点目は、今後の外部顧問との連携・協働を進める際に必要となる観点について、教員と外部顧問との間で部活動の目的や育てたい子どもの姿を共有し、そこから教員と外部顧問の果たすべき役割を明確にして、各自が役割を遂行することが必要であることが考察された。

#### IV おわりに

本研究では、外部顧問の導入や「ガイドライン」の実施に伴うマイナス面の検討および中学校運動部活動の効果的指導のあり方を検討するために、公立中学校の運動部活動に従事する教員と外部顧問へのインタビュー調査を行った。

インタビュー調査から得られたデータを M-GTA によって分析した結果、中学校



運動部活動においては以下のようなマイナス面が明らかとなった。

- 1) [練習環境の制約] [練習時間の制約] [競技固有の制約] という3つのサブカテゴリーから構成される【[A] 環境の制約】というカテゴリーが生成され、様々な制約によって「ガイドライン」に沿った運動部活動運営の困難さが明らかとなった。
- 2) [役割像の不整合] [外部顧問と学校システム] [連携の困難] という3つのサブカテゴリーから構成される【[B] 指導者間の連携】というカテゴリーが生成され、教員と外部顧問との役割分担や連携の不調和が明らかとなった。

2018（平成30）年2月に静岡市の部活動ガイドラインが示され、2019（令和元）年8月から全面実施されている。静岡市のガイドラインは、スポーツ庁が2018（平成30）年3月に提示した「運動部活動のあり方に関する創造的なガイドライン」に沿って作成されている。合理的でかつ効率的・効果的な活動の推進のための取組として（スポーツ庁、2018）、静岡市においても活動日や活動時間に係る制限が設けられている。とくに、部活動の活動日程等については、集中した取組と休養の確保など（静岡市教育委員会、2018）、生徒の心身のバランスのとれた成長を促すためには、重要な試みと言えよう。しかしながら、前述の【[A] 環境の制約】には、練習時間の確保の困難さがあり、3つのサブカテゴリーの根幹を示していた。これらはまた、【[B] 指導者間の連携】にも関連していると推察され、本研究で対象にした教員や外部顧問が抱えるマイナス面に影響していることがうかがえた。

これらのマイナス面を改善していくために、科学的根拠に基づいた効率的・効果的な練習内容や指導方法のエビデンスの積み上げが必要である。また、教員と外部顧問の連携では、指導者間の役割分担を明確にするとともに、外部顧問と情報交換をしながら協力を得ることは、より良い連携の端緒になると考えられた。

今後は、教員と外部顧問のみならず、学校組織全体、保護者、関係各種団体との連携を図り、当該部活動の適切な指導体制を構築していくことが課題である。

## 謝辞

本研究を実施するにあたり、多大なるご協力をいただきました元静岡市教育委員会学校教育課 木下雅人様、インタビュー調査に快くご協力を賜りました8名の指導者の皆様に対し、この場を借りて深く感謝を申し上げます。

## 付記

本論文は、2018（平成30）年度 常葉大学学内共同研究「部活動における外部顧問との連携に関する質的研究」（研究代表者：大矢隆二）の研究成果の一部である。

## 引用・参考文献

- 大矢隆二・百瀬容美子・山根悠介・柳本雄次（2017）投動作学習を通じた児童の心理的変容プロセス. 日本教科教育学会誌, 39(4): 59-69.
- 大矢隆二・田井優子・木宮敬信・黒岩一雄・柳瀬慶子・百瀬容美子・河合美保・川里卓（2019）中学校運動部活動の効果的指導の取り組みに関する研究：教員と外部顧問へのインタビュー調査をもとに（Ⅰ）. 常葉大学教育学部紀要, 39: 117-126.
- 木下康仁（2003）グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い. 弘文堂, pp.236-237.
- G.R. ファンデンボス（監修）：繁榊算男・四本裕子（監訳）（2013）APA 心理学大辞典. 培風館, p.218.
- 公益財団法人日本体育協会（2014）学校運動部活動指導者の実態に関する調査報告書.  
<https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data/katsudousuishin/doc/houkokusho.pdf>,  
（参照日 2019 年 10 月 21 日）.
- 静岡市教育委員会（2018）静岡市中学校部活動ガイドライン.  
<http://www.city.shizuoka.jp/000770705.pdf>, （参照日 2018 年 3 月 10 日）.
- スポーツ庁（2018）運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン.  
[http://www.mext.go.jp/sports/b\\_menu/shingi/013\\_index/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2018/03/19/1402624\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/013_index/toushin/_icsFiles/afieldfile/2018/03/19/1402624_1.pdf), （参照日 2018 年 8 月 10 日）.
- 能智正博（2014）質的研究. 下山晴彦・遠藤利彦・齋木潤・大塚雄作・中村知靖編, 誠信心理学辞典（新版）. 誠信書房, pp.47-48.
- 文化庁（2018）文化部活動の在り方に関する総合的なガイドライン.  
[http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kondankaito/bunkakatsudo\\_guideline/h30\\_1227/pdf/r1412126\\_01.pdf](http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kondankaito/bunkakatsudo_guideline/h30_1227/pdf/r1412126_01.pdf), （参照日 2019 年 10 月 21 日）.
- 文部科学省（2017）学校教育法施行規則の一部を改正する省令.
- 文部科学省（2017）部活動指導の制度化について.  
[http://www.mext.go.jp/prev\\_sports/comp/b\\_menu/shingi/giji/\\_icsFiles/afieldfile/2017/10/30/1397204\\_006.pdf](http://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/b_menu/shingi/giji/_icsFiles/afieldfile/2017/10/30/1397204_006.pdf), （参照日 2018 年 8 月 10 日）.
- 文部科学省初等中等教育局（2018）教員勤務実態調査（平成 28 年度）の集計【確定値】.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/30/09/\\_icsFiles/afieldfile/2018/09/27/1409224\\_003\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/09/_icsFiles/afieldfile/2018/09/27/1409224_003_3.pdf), （参照日 2019 年 10 月 21 日）.